

関西には、援助職が自主的に集まり続ける 20 年目を迎える事例検討会があります。そこで行われている事例検討の手法はジェノグラムワークです。意図的にケースの情報を制限し、そのケースが歩んだ、もしくは歩んだかもしれない可能性を参加者とともに、たくさん想像し、出します。その中には、事実と異なることが含まれています。事実より、困難な意見があれば、その家族が乗り越えた危機です。そこから家族のストレングスが見えてきます。事実よりも、よい状況の意見があれば、そのケースが実現可能な目標になるかもしれません。事例提出者は、ケースが乗り越えた「努力」を知っている人になり、更に今後の支援について現実的なプランを持つ人にもなります。大先生だけがコメントをするのではなく、参加者全員で考え、話し合いますので、誰もが資源となります。資料作成の負担、事例報告の負担もほとんどありません。これは、事例提出者を応援することに狙いを定めた事例検討の一つです。

困った状況を事例提出者が出す時点で、援助者もその困った状況に含まれています。そのシステム全体を扱うためには、ジェノグラムに加えて、社会関係を加えたエコマップを事例検討でも作成し、議論を進めます。ケースだけでなく、支援者、支援機関を含めた全体の理解と、そこでの力動が明確になり、今後の方針が見えやすくなります。

この「フォスタリングソーシャルワーカー養成講座」のフォローアップ研修でもジェノグラムワークを行います。20 年目を迎える「家族をテーマにした事例検討会」を主催する千葉晃央が担当します。講座修了後も 3 年間、同じ講座を学んだ仲間とともに学び続けることができます。あなたの現場を支え、そしてあなたのがんばりを知ってくれている仲間ができ、一緒に援助職としての成長を感じる。そんな場所を、この講座は皆さんと共に作っていきます。